

＜発炎筒混入によるSHR（シュレッダー）操業上の危険実態＞

(社) 日本鉄リサイクル工業会

1. 平成18年8月発炎筒の危険性に関するアンケート調査実施。発火のメカニズム、発火の頻度、発火（事故）の具体例などにつき多数の報告と事前除去の強い要望が寄せられた。この結果に基づき、同年9月に経済産業省、環境省に対して実態説明と事前除去の要望実施。
2. 平成19年1月、平成20年4月に実施した自り法に関するアンケート調査においても発炎筒の危険性の指摘と事前除去の強い要求が多数寄せられた。この結果を踏まえ平成19年7月および平成20年7月の産構審・中環審合同会議にて善処方要望の意見陳述。
3. 平成20年11月には発炎筒問題とエアバッグ、LPGタンクに特化したアンケート調査を実施した。
 - ①対象業者：工業会会員の破砕処理業者117社
 - ②回答数：103社（90%）
4. アンケート結果（発炎筒に関する部分）
 - ①ほぼ全業者が発炎筒が操業上重大な危険性をもつと認識しており、各社それぞれに事故防止対策をとっている。
 - a. 丸車等事前に発見除去できる場合は除去（除去後の処理については③参照）
 - b. SHR（シュレッダー）処理前に散水
 - c. モニター、目視等で全工程監視。消火体制構築
 - d. 発火等発見の場合は操業停止し、消火
 - ②アンケートでの（重大な）発火頻度は
全国合計で1カ月当たり約60件
事故につながり危険と感じられた件数は約36件
実際に「事故」まで至ったとされる件数は約8件
と回答されている。
 - ③回収した場合の発炎筒の処理では
 - a. 自社で保管後、産業廃棄物として処理 50%
 - b. 前工程業者に返却 25%
 - c. その他 25%となっており、その他の回答では現在もそのまま保管（4社）、長時間水に浸しその後シュレッダー処理（3社）、炉で焼却（3社）、等処理に苦慮している実態が回答されている。発炎筒メーカーの回収システムを利用しているのは1社のみである。
5. 発火時も迅速な消火体制をとっているため、幸いこの1年間重大な火災事故は報告されていないが、過去には発炎筒が原因である可能性を排除できない火災事故も数件報告されており、今後も重大火災事故発生の惧れは消えていない。
また、火災事故には至らぬまでも、発火／消火による操業停止、事後処理等による操業上のロスも大きい。